こゝろのやみ

靈徳の巻

世の光……一
天尊如來德……三
奇特法……八
天尊……一五
法身の範圍と報身の範圍……二三
法身と報身の領分……二三
教祖……二八
如來の十二光……二九
念佛三昧……三〇
觀念と憶念との別……三二
甚麼してかう戀しい……三三
天然素質……三三
業障深重……三四
如是力作……三五
基督の如く……三六
尼衆……三七
靈魂有無の諸說……三九
ソクラテスの道德及靈魂觀……四一

世の光

大乘佛教の要を知らんには、先づ如來の三身と云ふことを能く了解し給へ。如來は本一體なれ共、一方には一切衆生を產出する本と爲りて法身と云ひ、一面には衆生の心靈を長養して永恒の常樂に歸らしむる處の報身と曰ひ、又人類に應同したる身と現じて教を爲すを應身と云ふ。故に一體から三身と分れなされた所以である。

法身。毘盧遮那と云ひ、是れ徧一切處と云ふ義にて、宇宙全體を體と及び心を爲すの謂である。故に宇宙は永遠に活ける法身佛である。形式としては天の日月星辰の運行より、地上一切萬物の生成に至る迄の萬法の大原則である故法身と名づけ、內容としては此ビルシャナの胎內に無盡の性德を具有して萬物を產出す故に、如來藏性と名づく。宇宙全一精神と云ふを宗教的に云ひ表せば法身と云ふのである。夫から產出されたる衆生も悉く小法身小造物であると共に、佛性てふ佛と成り得らるゝ性を有てをる。然るに人の具せる佛性は、喩へば鷄の卵子が孵化せざればならぬ樣に、大ミオヤの慈悲に攝化せられねば佛と爲ることはできぬ。爰に於て報身佛の靈力を仰がねばならぬ。

報身。梵に盧舍那と曰ひ、譯すれば淨滿と云ひ、又光明徧照と云ふ。淨滿とは、如來は智慧慈悲及萬德豐滿し、紫金の身無量相好具足し、衆寶莊嚴の淨土に在し、諸〳〵の法身大菩薩の爲に圍繞せられ、淨樂我常の園に眞善微妙の花匂ふ。菩薩の爲に他受法樂を施し給ふ故に淨滿と名づけ、又光明徧照と云ふは、如來は心靈界の太陽にして智慧と慈悲と威神との光明を以て、念佛の衆生を攝めて靈化し給ふこと太陽の光熱化を以て地上の一切の生物を化育し給ふが如し。法身から受けたる佛性の卵を報身の光明に依て孵化して成佛せしむ。其靈德無量なるも十二の光明を以て一切の德を表す。

應身。應身は淨界の報身佛より身を分けて、此世界に應現し給ふ釋迦牟尼佛を云ふ佛陀の出世の本懷は、衆生が心の闇に生死に沈むを憐れみ、無限の光と永恒の生命に入るべきの眞理を敎へんが爲のみ。八十にして入滅し給へども神は無量壽の本土に歸り給ふ。

斯く如來は三身に分るれ共唯一の無量光壽如來なり。

佛敎は實に廣大である無限である。然れども如來十二光の靈名によりて體を得る時は、一切の佛法を盡して遺すことなし。

天尊如來德

天尊とは涅槃經、五天中佛を第一義天と云ふ。如來は佛性不空の義を解知し給ふ故に。

如來を第一義天尊義に於て三身各天尊なり。法身は自性天眞本有法身常住の理體、唯一本然淸淨にして不遷不變、能包含萬法、統攝萬事、是本然自性。

法身如來德。天地萬物の常恒に行はるゝは法身佛の行德である。一切萬物の生ずるも、一切萬物の行はるゝも法身の天尊が天則の理法を以て萬物を產出し養成し給ふを法身の働きとすれば我々人類は天地間に發生したる源につき、大意をのぶれば絕對大靈の一切知能から發展せられたる一面の自然界である。此自然中に一大陽系に屬する地球に吾々は生息し、太陽も絕對の一分身である。太陽より分身したる地球、此地球も初めは一の瓦斯態で、漸々に變化してつひには原始生物發生するに至る。其生物の起源に就ては說區々なれども皆憶測に過ぎぬ。何れにしても極小の生物單細胞生物たらんも、其生物も其源は絕對の大靈の肉性的關係あるを以て其極小生物も終には人類に成得らるべき伏能を具有してをる。故に生物は外界の與ふる限りは發達す。佛敎にて、生物の內的伏能が既ち因にして、外界の之を助成する力を緣とす。故に原因に具へてをる伏能が外緣に助成せられて漸次に進化して生物相互に競爭し共に相資けて發達し、竟に高等動物の無數の階級を經て終に人類と成り、人類も原始の至て矇昧なる人類より進み〳〵て文明となり其中に因緣に適すれば益々發達す。因緣に適せざれば衰耗す。

人類も本動物なれば、動物共通の身心の性を以てをる。人の精神には動物共通の生理的の性とまた人類特殊的の理性を有して居る。理性は他の動物にはない。人間特殊の心の働である。萬般の事理を辨別し理解し認識し判斷する等の心の作用、すべての道理を辨へる心の働である。文明に進めば益其理性が發達する。次に靈性（佛性）とは是は人類精神中最高等の性で、靈性は理性で知ることは出來ぬ。心靈界の如來と感應しまたは啓示を蒙り靈化せらるゝ等の宗敎上の心理現象は悉く靈性に於て感覺する釋尊が生死の本源永遠の生命の如きはとても學問に於て知れぬ。

已に爰まで進みしは法身天尊の宇宙に行るゝ德を被りてつひに高等なる知能の人類まで進化して極小の最下等生物より進みたる結果こゝに至つたものは法身天尊の働きである。

進んで人の精神の高等なる靈性を發達し終局目的の絕對永遠の涅槃界に攝取して正覺卽ち成佛せしむるは報身天尊の働である。

報身如來德

法身天尊は絕對なれども其徧動力から發現せられたる自然界なれば、天地世界天尊の御（名）に依て萬物は生存し、其が一切知能の働が卽ち外面より見れば空間に十方と時間に三世を形成し、萬物は因緣因果の規定的に生滅變化して居る。其因果律に係る我等衆生も、內性に法身より受たる靈性が、一大法身から縮少した靈性を具して居る卽ち法身の卵である。此靈性の卵を孵化する時は、吾人も靈性が開けて天尊の佛子と成り得らるゝ。

一切衆生の靈性の卵を攝化する爲に、一大法身より中心眞體に萬德圓滿の現れが卽ち報身光明遍照尊である。之は法身より一方に自然界に太陽と示現して、一切生物養生の德用を施す如し。光明徧照尊は精神界の太陽である。太陽に光熱化の三線を以て一切の生物を養生する如く、光明尊は智慧と慈悲と威神の三靈力を以て衆生の心靈を開發し靈化し給ふ。

報身遍照尊は神聖と正義と恩寵との三德の光明力を以て、常恒に一切衆生の心靈を照し給ふ故に天尊である。其光明を以て衆生の心靈の佛性を開き、惡質を脫却し、聖意にかなふべく佛子として靈育し給ふ働が宇宙に充わたり、如來を信念する人を攝めて化し給ふ。之を如來の德とす。光明天尊は一切衆生の心を攝化し給ふ。

經に如來の威神光明最尊第一、また無量無邊等の十二の光明は心靈界の太陽として衆生の心を靈化し給ふ。常に其働きは宇宙に行はれて居る、然れども信念の者のみ化を被むる。

宇宙の天尊より無盡の形相を人類に應同して顯現するを應身と云ふ。

應身とは敎祖釋迦文佛なり。法身としては天地萬物を產出し、報身は常樂界に常恒に在して智慧と慈悲をもて、一切の人類を攝取し給ふにも此土に出で敎を垂るゝに非

ざれば衆生は心の闇に覆れて知るに由なし。

報身は高妙にして無明にさまよふ人類には直接に此と關係を結ぶこと能はず。常樂國に在せる報身如來より此世界に釋迦牟尼佛一代の教を垂れたる相を八相と云ふ。

奇特法

宇宙は實に奇特なり。靈妙なり、不可思議なり。絶對なる不思議者は即ち如來である。ピルシャナである。然るに吾人の眼は宇宙絶對者の只皮的表面のみより感覺することできぬ。されども吾人の眼に視ゆる天體の星宿が運行するを見ても、地上の動植物などが生滅變化起伏隱顯するを見ても、實に不思議の表現ではないか。

發展せられたる萬物は何れも不思議である。世に謂ゆる造化の妙用奇妙なり。宇宙の謎などに七不思議を擧げて解決難い謎と云けれども實は萬有悉く不思議なり。「龍は一滴の水を得れば天下に滿る大洪水と爲す況や佛力の不思議なるをや」と傳ふれども造化の妙用何物か奇特ならざらん。

佛教に云はく、此宇宙の奇妙不思議に權と實とあり。宇宙の表面に現はれたる萬有起休隱顯生滅變化實に千變萬化して止まぬ。此世界的大パノラマの活現を見よ。之を世に造化の妙用と云ふ。佛教に如來藏の顯現と云ふ。此らの現象界の奇特を權と名づけ、吾人の心靈界に對する超自然の妙用を實と云ふ。

惟力亂神を語らぬ孔子も天何と言ぞや四時行はれ百物生ず、また上天の載は臭もなく音もなしと。また君子の道は費にして隱なり等とは宇宙の奇特者に對しては歎せざるを得ぬ。ベーコン曰ずや「哲學は少しく學ぶ時は無神論に陷るが、深く研究する時は眞に大なる宇宙の九天無窮の九蒼の高きに對しては人智の甚だ微にして唯無限者に對して畏敬慕伏する外なきに至る」と。

絶對者の靈妙不思議なる心靈界に行はるゝ處釋迦は之を阿彌陀佛の不可思議功德と稱揚し、一切の賢聖も宇宙に神秘的の一切衆生の心靈を攝取し靈化するの妙用を不可

思議功德と讃歎せざるはなし。

ケーラスの佛陀の福音に阿彌陀佛の不可思議なるほど靈妙奇特なるはないと。

絶對不思議者から自然界に顯現する大法則に依つて生成せるは之を法身佛の、尙此生物中を進化せしめて人類の如きの精神を攝取し開發靈化して成佛せしむる妙用を無量光佛のと云ふ。

信仰に現るゝ奇特

宇宙は絶對不思議者から顯現し造化せられてゐる。宗教は奇特の權化なり。世には宗教は全體奇特の如くに想てゐるが、然り而して其奇蹟に權と實とあり。謂ゆる手段と目的とである。物質的に超自然の現象は權である。觀音經に一心に觀音名を稱せば設ひ大火に入るも火燒くこと能はず、大水入るも漂されず、刀杖を以て害を加ふるも段々壞して害すること能はず等の奇特は信仰に由つて是の如きの靈驗疑ふべからず。

進んで不思議者の衆生に對する目的としての奇蹟は一層不思議である。一生造罪の惡人が臨終に惡業の獄火現前して永く燒くべきを善知識の教に依りて改悔して、一心に十念の功に忽ちに獄猛火は變じて清涼の風となり金蓮花日輪の如くに現はれて淨土に生ずと。また現に罪惡の凡夫貪瞋の猛火に心情を燒かれてをる輩も至心改悔彌陀の光明に靈化せらる時轉じて光明の生活に入る。

若し衆生貪愛の水に漂され餓鬼道の中に墮落せる人も至心に念佛して如來の光明に靈活する時は變じて淨土の人と爲る。

精神的に殘害殺戮互相呑噬の獸類的の人も彌陀の光明に美化する時は心機一轉して光明の生命となる。

世に精神的に人格を革新し靈活せしむる、かほどの奇蹟の眞價なるはあらじ。

釋尊がウルビンラ迦葉を度するに種々の神變奇特を現じたるは手段にして彼が從來の事火外道の非眞を自覺し、離垢法眼を得つひに聖果を得せしめ精神的に靈活せしめ靈的人格に革新せしめた處に眞價あり。されば釋尊の神靈奇特を以て邪魔外道凡夫を降伏する目的は聖き人に靈活する處に目的あり。一切の經に一會の說法には數多の人

々が法眼淨を開きて聖果を得し者みな實に是奇特なり。いかなる奇特か之に如かん。

彌陀の威神力と不可思議功德

宇宙萬有が絶對の不思議者から、萬有內存の一切智と能とに由つて、常恒不斷に（　）進せられてゐる。之を世に造化の妙用と云ふ。彌陀法身の法則より萬有を律して生成することである。是れ法身が自然萬有に對する威神力である。天命は神聖にして無上の權威あり。萬有此則に反する一物もない。

法身は自體中より一切を產出し分身して太陽及び地球等の星界を造化し之を世界性と云ふ。其世界から生物を分身し產出して世界の上に生存せしむ。此生物は法身より分身的に產出せられたるものなれば、全體を縮少した小宇宙小我である。故に小宇宙には之を漸々に發展さして伏能を開く時は其內性卽ち精神的に宇宙全體と相卽相入して全部を相容する性を有つてゐる。是また不思議ではないか。此生物を精神的に（　）て一切の生物を神の目的の如くに心靈生命とするのが卽ち無量光の威神力不可思議功德である。十方一切の世界及び衆生は法身の威神力に生產せらるる個々者にして一切の終局目的に隨つて還性完成したものが卽ち諸佛である。

法身の不可思議功德から一切衆生は發展せられたので、一切諸佛は報身の不可思議功德から開發靈化せられたるものである。報身佛は一切衆生を攝取靈化して成佛せしむる權威者である。

敎祖の權威

太陽が其一系統の中心としての威力を八つの星宿に及す如く、絶對の心靈界の太陽として一切衆生の心靈を攝取して靈的に復活し佛道を成就せしむる權威は彌陀報佛である。

彌陀の靈的威力の大光明が十方一切衆生を攝して佛化し給ふ。

宇宙中心の本尊たる彌陀無量光より分身して一世界の中心を本尊とし地上の一切を攝して敎化して彌陀の慈悲の手に渡すべき權能を有するものは獨り釋尊である。

釋尊の心靈上の權威は實に世界獨尊である。

不可思議功德の大權威者の故に世尊と云ふ。

又世尊は大自在者である。大權威である。言の如くに火も焚けじと言へば火も燒くこと能はず。水は氷れり。此氷上を渡れと云へば、曰ふ如くに一切の事が道の如くに事實を爲す。そは世尊は大自在者の權化なればなり。大自在者とは盧舍那大我なり。梵網經に我今盧舍那方坐蓮華臺と。天台は我今の我とは八自在我卽ち大我なりと釋せり。佛陀は大我の盧舍那の化權なる故に世尊なり。

宇宙的大權能

北辰の其處に居て衆星之に拱ふとは天體に一切の星宿が歸宗すべき勢能のることを示された。宇宙の萬有は一大權威者に依て行はる。天體の星宿、大自在の大權威者の命令の下に行はれ且つ活動しつゝある。

世尊は此地上に於て一切人類の上に立ちて一切の衆生を敎令の下に度すことを得る大權威者なり。我らが念佛三昧に個々に於て無我となり大我の威神力が加はる處に於いて宇宙の大權能の力が身の上に奇特の力を與ふるなり。然る時は言の如くに行はる例は疾病者に對して、汝牀より立てと命ずれば卽ち起立することを得る如くなり。

三昧に依て大權能の靈力と合して大なる源より我身に發現する力は大なり。

天　尊

法身の天尊としては、法身ビルシャナ、徧一切處、絶對の大靈態にして十方三世を包容して遺すなく、常住不滅、其本體に地水火風空識、色心の靈體一大妙色、此六大に一切無盡の妙理を具足して遺すことない。如來は絶對の心靈なれば一切智一切能の德を以て常住に一切萬物造作の則とし力として一切を建設し作爲す。宇宙萬有の作爲が卽ち法身常住の行動と業作なり。天に日月星辰の運行より地の一切生物起伏生滅皆法身天尊の行爲である。法身天尊は徧一切處、一切萬物に內存す。

假令愚昧の夫婦の間に産出せられたる子でも其身體の構造すべての組織の巧妙なことに至つてはいかに智慧と技藝に堪能なる人も子を細工業に作ることは出來ぬ。凡ての植物にても其生理的構造の巧なことに至つては、實に不思議である。萬物内存の天尊の御働と云はねばならぬ。亦天體の運行より天地萬物に其命令的に行はるゝ法身天尊の法則に隨つて動く。天言はず四時行はれ百物生ず、是天尊の命令である。一大天尊の分身たる天體は一切の星宿なれば一分の天尊たり。太陽も法身の一分身なれば八の惑星其他の屬星に對して天尊である。一切星宿も天尊の分身なれば我等が此身體も實に小なる一大法身を縮小せる分身なり。故に一大法身に具有する十界三千乃至一切の萬法は此個體の性に伏能し居る。

一切衆生に悉く天地法界十界三千の妙理悉く具有す。

宇宙全一の六大妙色心性、此一小六大の中に具有す。一切の萬法悉く法身の顯現ならざるなし。經に法の法位に住して世間の相は常住と。

密家に云ふが如くば金胎法界曼荼羅、塵數諸尊悉く一大天尊の分身、兩部塵數諸尊悉く大日普門萬法身の故に、本地法身徧一切處、有情非情山河大地草木叢林風聲水音虛空法界、天尊如來德ならざるなし。

法身の天尊は第一義天、絶對獨一の尊體にして宇宙全體一切の萬有は有情非情の一切の作爲に悉く内存の如來の行德ならざるはなしとすれば、我等一切衆生一大天尊の縮小的分身なれば、無邊の性德を開發す。天台の語を假りて云へば、心靈に十界三千の依正一切の萬法悉く具有す之を開發するにはまた報身としての天尊如來德を仰がざる可からず。

報身の天尊は心靈界の太陽として智慧と慈悲と威神の光明を以て衆生の心靈を開き靈化したまふ。太陽が無からんか此生物は一草一木一人も活きて居ることは出來ぬ。無量如來の光明に依らざれば衆生の心靈が佛の子として活きることは出來ぬ。其天尊の光明に依りて身心共に圓滿に開發され靈化したのが此世の天尊釋尊である。

天の天尊なる無量光如來の衆生を攝めて靈化し給ふ光明に無量の德あれども、四智三德を以て一切の德を攝めるのである。四智とは大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智にて、三德とは神聖正義恩寵である。前の四智は太陽の光線が明く照す如く衆生の心の無明を照してすべての眞理を悟らして給はる作用である。凡夫の心は識と云て佛界の眞理を見ることができぬ。心は無明の闇である。然るを四智の光明に照されて（　）は菩薩なので、圓滿に覺るやうになれば諸佛と同じ覺である。

報佛の光明に法身般若解脱（亦神聖正義恩寵と云もよし）此三德は衆生の道德的人格を養成し給ふ如來の德光である。恰も大陽の化學作用にて稻の實を結ばしむる如く衆生身心の德を成熟せしむる作用である。哲學的に云はば、法身般若解脱にて宗教的に如來より衆生に嚴臨し給ふ德相を三德と爲す。

神聖

神聖は如來が衆生の三業の行爲を照鑑し給ふ智慧である。如來が神聖なる智慧の眼を以て、常に衆生の心と業とゝを明かに照鑑し給ふことを諦かに信ずる時は、喩へば嚴格なる父の前に居る小兒の如くに、我等自然と身も心も正しくなる。如來の神聖が人の道德心の本たる正知見正見である。正見とは如來の聖意に叶ふ了見にて、見込が正しいことである。正見から出て來る思惟と言語と身に爲すことも正しくなる。

道德法の根本は釋尊が自己の意見に依つて定めたるに非ず。本然法爾の理たることを示す爲に、釋尊が菩提樹下に於て正覺を成ずると直ちに三昧に入つて遮那天尊の許に詣られた。遮那尊とは無量光佛の異名なり。本佛が道德法の神聖なるを顯す。梵網經に示せり此經は道德律を說給ひしもの、時宇宙全體を一體とし蓮華藏界の蓮華臺に本佛盧遮那尊が坐し給ひ、千と百億との釋迦佛が各蓮華に坐して本佛を圍繞し給ふ時道德の根本波羅提木叉を誦したまふ。戒體とは即ち道德の法體を代表したる名なり。千百億釋迦も本佛の戒を誦し給ふを聞く。佛法中の戒藏、波羅提木叉を誦し給ふ。之を（　）て成佛す。

無量の諸佛が本佛の道德法の根本を誦するを聞くと云ひ、本佛も尙說（　）して誦すと云ふは、全體道德の根本は天然の法爾の理にして一切諸佛も自ら定め自ら制定したるに非ず神聖を顯はす爲に全宇宙を道場とし、一切諸佛を眷屬として誦し給ふ。道德律戒は日月の如し、亦瑤珞珠の如く、日月（　）瞻仰せざる者無きが如し。

道德法の根本は神聖。是天尊の本然の聖意である。如來の神聖が人の道德心の基礎となる。正見が如來の神聖より人の意志に現はれるものと爲す。正見とは道德の知眼の正しいこと、高等なる良心卽ち神より出でたる良心を正見と云ふ。正見は公平無私毫も私なき知見なり人は（　）欲の私に覆はれて正見を失ふ。如來の神聖は日光にて正見は如實に道を見るの眼である。神聖は善惡邪正を如實に照見したまふ智慧である。如來の神聖が人の眼となりて此の正見の開けし人は如實に有漏無漏善惡迷悟の心の道を明るく照すことを得。此正見は自ら神聖光の中に明かに見る故に惡道を避けて善道に向ひ迷を捨て悟りに達す。卽ち如來の道を知見して行く人である。

正　義

如來は道德行爲を命ずる正義なり。如來無上の覺位は至眞至善至美の極致なり。正義の道の終局なり。故に正義の者のみ如來の道を行く。

如來は捨惡選善棄麁取妙の正義を以て至眞至善の淨土を建設し給ふ。捨惡選善を以て本願として淨土を顯はす故に如來の聖意は我等が惡を捨て善を取り給ふ。故に如來は本願の光明を以て一切衆生の心の惡を捨て善を選びて取り給ふ。

生物進化の過程に於ても自然陶汰說の如く自然中に弱きは捨て强きを選び正當なるは發達不當なるは衰耗すべき性が存在する如し。唯少分の現在のみを見ては其理は知難しと雖も一切の生物が劣等より高等に進み不完全より完全に近づくを永く眼につくれば自然に生物選擇の性能有すと云ふことを得べし。

神聖と正義は、神聖は善惡邪正迷悟淨穢を正しく照す知見にして、正義は捨惡選善に向つて實踐する足である。

如來は神聖正義の德光を以て我等が正見と、正義の大道を如實に行はしめ邪惡を離れ、正善に如來の大道に行はしめ給ふ。

恩寵は大慈悲に宇宙の一切衆生の慈母として衆生の心靈を養成し給ふ靈力である。天尊が一切の親とし一切を愛育し終局親の完き如くに完に近づけ、親の眞善美の靈性を養ひ給ふ。

法身の範圍と報身の範圍

哲學者が自然界と叡智界または感覺界と觀念界とに區別してゐる。感覺の範圍なる自然界の一切は法身の領する所、天地萬有が天則秩序の理系によりて行はるゝ自然科學の對象とする所。法とは天則の謂、身とは天則を總括する所の本體。

一大本體の自然界と心靈界とは一體の兩面にて法身の一分身なる人が身體は外部より見る所は悉く物質にて、內觀すれば頭より脚に至るまで悉く精神ならざるなし。

法身、廣義に云はゞ物心無碍一體の實體なれども、今法報待對の時には法身は天則に關する方面卽ち感覺する方面なり。報身は終局目的に衆生の精神を攝取して永遠の光明に歸着せしむるは報身なり。

法身と報身の領分

人の精神と身體、物と心とは本一體の兩方面にて精神と身體物質と云ふも全く獨立の實在にあらずとの說。

（一）物心一體論に三に分別す、物と心とは本一體の眞性にて一方には精神と現れ他方には身體と現る、唯一本體の二性現。

（二）外感覺の現象界は物自體にあらず、內的知覺の心も本體に非ず。一の現象に過ぎず。物質と精神の根源は一。

（三）物心一體の兩面觀、物質とは外部より見たる、內省は心である。

物質と心性とは實は同一不二のものを異方面より觀察するに過ぎず。

一面心的作用は數多の感覺及び表象が「我」の意識に統一せられたるもの。物質とはすべ(て)感覺及び表象が統一結合を爲さ(る)者。

物と心、身體と精神、兩面に統一結合したる此同一不二のものも根底は「我」である「我」とは何。精神が直接に自己を認識せるもので、統一せられたる感覺表象之を基礎として行はるゝ複雜なる心作用の結合。

外的感覺に基ける空間的(物　客觀觀念を物質と云ひ內的觀念の非物質非空間觀念によつて行はるゝ精神と云ふ。

內的觀念には感覺概念思考判斷意志等の相互關係及活躍に現はれ、外的觀念に在つては物質、力、エネルギー等の時間及び空間の變遷交涉として(　)する精神界と物質の相待的でなく純正一にて精神界と物質界と一體の兩面に過ぎず。

同一不二なるを物質界と精神界に。一は物質的空間的器械的說明と因果の關係を明にすべき是自然科學の任務にて、非物質非空間非器械的無機界と有機界の論なく物質的感覺界なるには自然科學器械的の說明卽ち因果律である。

眞に存在する者は精神界にて物質界は其が客觀化せしに外ならず。

因果律と目的

天地萬有外部より見れば悉く自然的物質が器械的に因果律に支配せられて居る。日的は精神的概念意識によつて初めて明(　)時全く主觀の者にて、目的には手段あり。主觀的概念系統。

人間の目的行爲を見るに一定の目的表象動機となりて之を繼起し數多の精神作用が續出して終に其目的を實現せしむ。之を客觀的物質的に解析すれば目的表象なるものは大腦生理作用に相當し續いて神經系及び筋肉に於て一定の生理作用に喚起され運動を起し外物に作用する、之れ繼起に相當す。

法身は天則的卽ち自然界の萬物が天體の規則正しき運行四時行はれ百物生ず。此天則の自然界に行はるゝものは悉く因果律に行はるゝ此の因果法の天則秩序の統一的根源を法身とす。天地的萬物は悉く因緣因果の則を以て行はれてゐる。空間には因と緣と相互に關係し例へば天體の太陽系に屬する太陽を中心として數多の惑星等が空間的に因緣相關して、また有らゆる天體の空間の關係は網の如くに天則的に因緣相成れば成し、また因には果あり因果相關して過去際に至るまで。

世界にあつて因緣相集つて生じ住異滅すればまた成じ、悉く空間的に因緣を以て網の如くに連絡し時間には因果相關して盡未來際にまで繼續す。

すべて客觀的物質的概念に基ける因果律は自然科學の範圍である。完結せる因果律の法則に從ひて主觀的精神的概念より成る目的論は哲學の領分。此の精神的と物質的との此の二樣の概念系統は互に並行するも各其獨立を保ち何れよりも混亂しては居らぬ。

目的觀は主觀的のもの。

すべて自然現象は法身の範圍にて例せば發生學の如き內的有機的素因たる遺傳物質と外緣の順應陶汰等の因果的必然的結果として機械的に之を說明すべき進化論の如き機械的因果的に外部より經驗の出來る限りは自然科學の領である。

法身の域は自然科學の域にて生物進化の極人類に至りて意識的に主觀界の方面は哲學の區分として見れば、報身佛とは卽ち純主觀界の現象にて自然界に經驗すべきに非ず。主觀としても宗敎的靈性開發して心靈界に發見すべきものである。起信論に說くが如く報身佛は凡夫二乘の肉眼を以て見べき境界に非ず。諸の菩薩が淸淨業より成れる業識を以て見べき境界にて身に無盡の相好光明ありまた無量の衆寶を以て莊嚴せる淨土に在ます等。

報身妙色莊嚴等の相ありと雖自然界生理學的の現象にあらず。故に報身の智慧光明等も衆生一心に三昧を修して精神界に於て觀べき境界なり。心靈界卽ち觀念界は自然

界と北に無邊際である。

心と物、我と外界、神と自然此の二面は古來數多の科學者や哲學者の深く頭腦を惱ましたる人生の根底に横はる不思議の謎である。自然科學と哲學との此唯一の神を兩方面より研究すべく知識すべく命ぜられたり。

教祖

勤苦六年、竟に摩訶陀國の伽耶のヒバラ樹の下金剛座上に坐して禪定三昧に入る。一夜天魔の碍害を降伏し、臘日八日東天に明星輝き出る時、無明の夢醒め、朗らかに正覺を成じ、罪惡の源を解脱す。佛陀は成道の曉より鶴林の夕に至るまで無量光に入り、涅槃常住の無量壽に歸すべき眞理を敎へ給ふ。佛陀は八十にてクシナの鶴林に別を告給へども、神は無量壽の涅槃界に歸り給ふ。

如來の十二光

如來は心靈界の大日輪、斯光に依らざれば一切衆生成佛すること能はず、過去の諸佛は斯光明に由つて成佛し現在の諸佛未來の諸佛も悉く斯光明に依つて正覺を成ず。

斯十二光に諸佛萬法乃至一切の萬善萬行を攝めて遺すことなし。故に密敎にては十二光は大日如來の萬德と名づけ、楞嚴には十二光佛名を以て一切の諸佛を代表す。今は無量壽經に彌陀十二光を以て一切（　）

もろこしの山のあなたにかゝやかむ
わか日の本のてらす光りは
——聖者道詠——

念佛三昧

實に念佛三昧を宗とはし、往生淨土を趣とは爲し、三昧得れば佛を見、靈き心に更生る、便ち佛を見も時は、靈き心に更生る、念佛三昧は能念と、所念と調和する處、如來の心光被むれば、所念の佛心光明（　）、能念の心も佛、衆生佛を念ずれば、佛も衆生を憶念し、此彼の三業離れぬを、卽ち親緣とは名づく、衆生佛を見ま欲しく、念に應じて卽ち現じ、所念の佛と能念と、（接）てを近緣とは曰ふ、衆生の惑業障の、闇黑は深くも佛、の光明にあはゞ（　　）、增上緣とは名づく。

念佛三昧は一らに、神を彌陀に還つせみの、集中して自餘の念をやめ、譬へば射を習ふに的に、心を一に（集）めるに、念々相續して、心々相續して勇猛に精進し、金剛石も勇猛に精（力）あらば琢磨せらる、念々相續不斷に精進し、彌陀の靈に遇ふ時は、定の歡喜覺へしめ、我等が心の麁（　）なる心、心々彌陀を念ずれば、聖き（　）にみかゝれて、（未定稿）

觀念と憶念との別

我はたゞ佛にいつかあふひくさ心のつまにかけぬ日ぞなき

信樂〈信……知
樂……情

智情意の、

知之——信認——知力
好之——欲求——意志
樂之——愛樂——感情

觀念と憶念と又愛念との別

觀念は知力信仰にて理性を以て觀念推察して佛の相好又智慧實相等を知見する事、

愛念は如來を戀愛憶念する事、前は理性、後者は感情にて、哲學的に觀察するよりは宗教的に戀念憶想する事は憧憬して忘るゝ能はざる如きは最も宗教の內容豐富なるなり。

觀察は思索的に冷靜的に、戀念は暖溫熱誠にて自動的に衝動す感情である。

宗教は感情を中心とす、前者は形式的に後者は內容（　）ある。愛の三位は母子的、異性的、大小二我合一的。

甚麼してかう戀しい

宗教心の心の奥底に輝きて居る愛と云ふものは、不思議なものである。世の心の奥に此光のなきものは、いかに思ふであらう。宗祖のやうに心を傾けて或る物を奏仰してをる心を世の中に實在する哉いかゞか分らぬ。上天の載は音もなく臭も無くて、一向にあてもなきものに、憬がれてをるは一體甚麼いふ譯であらうと思ふに違ひない。

夫れも心の奥から靈の眼が開けてくれば其反對に思はるゝ。宇宙間此靈ほど諦かなものは無い。此相、此力ほど眞なるものはない。然るに世の中に之を疑ひ、また之に觸れることの出來ぬと云ふは奇怪であると。又世に如來ほど大なる、靈なる、美なる愛なるものはない。然るになぜに之を愛し、之を慕ふ心が發らぬものであらう。

世間の人は云ふであらう。宗祖には貌も形もなき人をだうしてそう戀しいだらうと。宗祖に言はしむれば是ほど諦かな美しい人をなぜ世の人は愛せぬであらうと。

天然素質

宗教を要するは、人は天然卽ち生れつきたるまゝの純朴の人には自然に劣態なる素質あり。而して人が立派なるまだ完全なる高等なる人格とならんには必ず之を脱却せねばならぬ素質が天然に具有する。此に普徧的の罪惡の種子と、また人々特殊的に氣質に稟けたるさまゞ〳〵なると、また習慣によりて種々に性質が分れたるなり。

普徧の惡とは、主我幸福とて唯自分の幸福ばかりを貪りて少しも他を顧みぬ。それは我身の愛さに他に害を與へても恕りもなき人の普徧性の固有の惡なり。

業障深重

如來の大光明は常に照り、經に彼佛光明無量にして十方の國を照して障礙する所なきが故にアミダと號くと。彼佛の光明常に照りわたりて在る其中に我ら衆生在り乍ら何故に其光明に觸るゝことができぬのであるぞとなれば、其は喩へば夜明けて日光の照らす下に在れば世の中も明かるくなりて萬物見ゆる如し。夜明の清風徐ろに吹き來りて凉やかなる心地もすべき筈なるに、世には私共は心を靜めて稱名してをれどもまた心の世界が廣く夜の明けし如きの心地になれずアナタ方の御談を承はると御言葉の上でさへもどふも私共の心の世界とは別のやうに夜が明けて晴れ〳〵した心の世界に逍遙して御座るやうに思はれるが、私共には此處全く光明中とは疑はれませぬが、實感に確かとそこに進みませぬが、如何にせば精神が如來の光明中に出ることができませうと。

答て、あなたはそこまで氣付きなさるに餘程（以下斷絶）

如是力作

相を見て性を察し、相を鑑て其性を識別するは是性相家の職とする所。相と性とは其天稟に先天なると後天なるとあり。其後天の性相を向上せしむるは宗教の能と要とある所以。其性相を向上せしめ轉換せしむるは力と用とによる。是精神力學の必要なる所以。

力は能力、作は業作。人は其能力丈に應じて作業を能くするは先天なり。而して屢作業努力すれば其結果として大に能力を發達せしむ。

精神力は若し之を分類せば形式と內容とす。

知力感情の强弱意志の强弱あり、斯等は能力の云何による。作業は力を發達せしむ信と愛と欲との三德は知と情と意とに於て大に能力を發達せしむる心能なり。

基督の如く

キリストが神子たるを自覺し神聖なる人道的使命を成遂し献身的生活は永遠に人類の道德的理想と成り力と成り光と望となれる如く。人もキリストの如く、十字架に倣ひて人生の行路を進みゆく一歩々々は肉に死し、不斷に神と共に見、神を感じ神を信じ、自ら眞理に照して歡喜と恩寵とに充てる生涯を送り衷心神の使命に行動し、神の忠實なる僕として、

罪惡と墮落より善良と光明へ。

苦悶憂愁を轉じて歡喜希望へ。

明日を憂へず。自己の生活を神に恩愛の御手の中に任し、自己現在の生活上に神意を體現することに努力聖闘するにあり。

心靈の救靈は不斷の見神、不斷の法悦より流露する不斷の懺悔、不斷の靈闘、不斷の向上精神。

不斷向上、神に近づく。

尼　衆

宗教心は家庭に於て素養を造るが最も功能多し。佛教を家庭に及ぼすは尼衆の任なり。

尼衆は家庭の保姆として佛教を普及せしむるに適當なり。未だ時代に適當し全く世を益する尼衆の教團あらざるが如し、個人としはあるもまだ團體としてはあらず、

宗立の尼衆學校はあれども其尼衆を適用するの教（會）なし。たとひ女子師範學校ありて女教員を養成するとも之を使用する學校なき時は（如何）。我宗尼衆校はあれど

も、卒業後之を適用するの教團なきは遺憾なり。

尼衆が學校卒業の當時は、空想的理想はあれども、實地に適用するの教團なき爲に止むなく不滿のなかに死亡吊祭のことに身を犧牲に供するに至るは皆然り。

此に於て我宗政家もまた之を適用するの道を講ぜず。こゝに一の尼衆の模範的教團を組織せんとするに付き貴尼の考を請ふ。適宜の所を擇んで一教團を結ぶ。

尼衆傳道團

一、本團は一般婦人に佛教を以て、佛教家庭を造る素養を爲さしめ、其の子女を佛教を以て信仰の素養を造るを旨とす。

一、本團は傳道の志深き尼衆と優婆夷を以て組織す。

本團は各部落に婦人會を設けて、其會員に家庭智識及び修養せしむ。

一、本團は目的を達せんが爲め、其手段として家庭に必要なる裁縫及び簡易なる家政科の教授を業事となす。

本團は家庭に必要なる知能を施す。

本團は一般家庭の保姆として、

靈魂有無の諸說

死一切終局、個の斷滅のこと。

死は終に非ず。個は存續。

個斷滅說にも一切皆（空）中形骸（外）。（空）とは心の或物を死後何らか存す。斷滅は個性存續を否定

個性存續中靈魂有形と無形、有形もまた現世と異り一種エーテル不可見質、細身存續、僧佉シャールホネ細身說

靈の歸趣 ┌ 魂魄離散　儒
　　羽化登仙　仙

輪廻轉生
天國地獄

物質不滅勢力恒存

吾人の肉物質精神一種エネルギ

生命不朽(生物學者)父は子に子は孫に綿々相傳不斷　個我こゝに死し　第三第四

遺傳理法誤りなし。吾人の生命不斷相續肉神共不斷、

死は人生煩累脱せし樂事と思惟するもの、

來世生活を憧憬す、來世要求、

死生一如觀、

佛敎、業相續

吾人の言動は一波動で萬波互に應じ感化は永久に。

卽、楠公忠魂　感化

ソクラテスの道德及靈魂觀

人世に處し正義道德を以て行動せんと欲せば其行爲の目的を知らざるべからず。其目的を知らざれば自己の行爲を調整統一し正當に指導を得ず。徒らに習俗傳說に盲從して各自悟了する處なからんか、其行爲德行に的中するも未だ眞の德行と爲べからず德行の基礎は一に知識にあり、各自其判斷力を以て是認する處に從ひて行ひ德行と名づくべけれども知は德の本なり。其知識の發生は各自の知識に由る。吾人は果して此の如き知識を有するか。

ソクラテース死生觀

一、靈魂は純にして無雜不朽不可視、故に定住して分解することなし。

二、靈魂は命令し肉體は服從す。故に靈魂は神的なり。

三、肉體の如き死後久く壞せず。首は久しく分離せず。靈魂淸淨なれば不可視界に去

る。然れども肉體の交通を以て汚さるゝ時は永く地上に迷ひ後に底下の形像に生る眞の哲人は獨り無垢にして全く諸神の境に昇る。

(イ)　シモニアス問ふ。靈魂は肉體の調和とせば肉體破壞せし時云何。

(ロ)　セーヘスは肉は靈魂を包含する衣裳とし衣着するに死して後に衣を殘す。一の靈は一生の間に多の衣を破りて最後の破(　)を免れ得べきや

ソ氏曰く　一、靈は肉に比して優越は素よりなり。然れども調和に至ては其調和せし要素に比し優越なる筈にあらずや。

二、靈は德と不德とを有す。卽ち調和と不調和となり。何處に調和の調和あらんや。

三、すべての靈魂は同一靈魂、すべての調和は同一調和にあらず。

四、若し靈魂を以て肉の調和なりとせば此兩者は常に一致合同すべき筈なり。然れども兩者は永久に鬪爭しつゝあり。吾人は肉の要素に制限せらるゝことなし。然れども其要素を統一する力を有す。

昭和六年十一月廿八日　印刷　　誌代郵稅共
昭和六年十二月一日　發行　　年二圓
編輯兼發行人　山崎辨成
小石川區關口町六十五番地
印刷人　小林七太郎
小石川區關口町六十五番地
印刷所　靜文社印刷所
電話牛込五四一九番
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番